文型と動詞型との関係について

日 塔 悦 夫

はじめに

本稿の目的は文型と H.E. Palmer の 27 動詞型との関係を解明することである。本稿は Palmer の 27 動詞型が、日本語教育の中から生まれた文法用語の「文型」から考案されたものと考える。そして Palmer の 27 動詞型は「27 文型」と表現しても差し支えない。なぜならば Palmer の 27 動詞型は基本文型だからである。

本稿は最初に「Ⅰ 文型と動詞型に関する先行研究」で、安井の「5 文型」成立の主張をまとめる。安井の説は「5 文型」が「Palmer の 27 動詞型」から影響を受けたというものである。それに対して、本稿はその逆に「文型」が「Palmer の 27 動詞型」に影響を与えたとする。「Ⅱ 日本語教育における文型の登場」では、文型が日本語教育の中から誕生した歴史的経緯を実証する。そして「Ⅲ Palmer の動詞型」では、Palmer の文型が、「動詞」の「型」となったことを検証する。

Ⅰ 文型と動詞型に関する先行研究

安井稔は文法用語「5 文型」が C.T. Onions の「述部の五形式」から「5」を借り、さらに Palmer の「動詞型」から「型」を借り、そして我が国でそれら二つが「5 文型」に新配合して成立したと定義した[1)]。つまり安井によると「5 文型」はすべて外国人からの借り物によって成り立った文法用語となる。

安井はこの異なる二種類の分類法に対する疑問も提起した。すなわち Onions の「5 文型」は文要素による分類法であるのに対して、Palmer の「27

動詞型」は文の要素による分類法と品詞別による分類法とを混在させたものである。この発言の真意は異なる二種類の分類法に対する疑問である。だが本稿は Onions の「5 文型」と Palmer の「27 動詞型」が同じであると考えている。

単純な「5 文型」は複雑な「27 動詞型」によって発展したと位置づける。また「文型」は Palmer の「動詞型」以前から我が国に存在し、この「文型」が Palmer の「動詞型」に影響を与えた ― つまり安井とは逆に Palmer の「動詞型」は「文型」から誕生した用語であると見る。 Palmer の「動詞型」は「文型」と言い換えが可能で、文型という考えは Onions の「5 文型」、それから Palmer の「27 文型」へと発展することができたのである。

本稿は次に文型が誕生した経緯を考察する。

Ⅱ　日本語教育における文型の登場

南満中学堂教諭の大出正徳は『コトバ』誌上で「文型」がいつ誰によって使われたかは不明であるが、大出が「文型」という用語を使用したのは 1921(大正 10) 年頃からで、それが印刷されたものは 1924(大正 13) 年の『初等日本語読本巻一教授参考書』で、そしてそれは今から 20 年も前のことであると述べた[2)]。

『初等日本語読本巻一教授参考書』で大出は用語としての「文の型」と「文型」を使用した。同書で「文の型」と「文型」に関して、大出は例えば、ある考え方を表現する場合に「文の型、即ち発表の形がある」として、物を指定するときに「これは○○です」のような「文型即ち発表の形式」を児童に習熟させることが教師にとって重要であると主張した[3)]。

また「香炉よりはその鋳型が大事だ。(文型尊重)」のようにも説明している。鋳物の置物よりその鋳型が大切となる、なぜならば鋳型が一つあれば置物がいくらでもできるからである。すなわち鋳型が基本的な文型で、この文型を覚えると多くの応用文が可能になる。ここで大出は日本語練習の基本となる

表現形式を、「文形」の替わりに新たに「型」を使用して「文型」と命名した[4)]。

大出はまた「○○です」と「これは○○です」のような基本的な表現形式を、一つの「文の形」と表現して、次にこれを言い換えまたは簡単化して「文形」とした。基本的表現形式は「文形」または同時に「文の形」と言い表わされ、意味は同じで「文の形」は「の」が省略されて「文形」となった。「文の型」と「文型」とが同じ意味で、「文型」は「文の型」の「の」が省略されたものである。また「文形」と「文型」とは同じ内容を表わしていることも自明である。

しかしながら、「○○を○○なさい」または「○○を○○ました」などのような基本的表現形式を、大出はほとんど「文の形」または「文形」と呼んだ。『初等日本語読本巻一教授参考書』で大出は「文の型」を一回、「文型」を五回使用したにすぎない。このことから用語「文の型」と「文型」はまだ新語で一般的でなかったと思われる。続編の『初等日本語読本巻二教授参考書』において「文型」は一回しか使用されていない。

だが大出は『コトバ』誌上で「文型」という用語を用いた教育方法が十数年間ほとんど進まなかったことも述べた[5)]。英語教育においてもまだ文型は使用されていなかった、文型のような意味を表わす用語のとき片山寛は「文の要素」(The Elements of the Sentence)[6)]、岩崎民平は「文の形式」(Forms of the Sentence)[7)]、と呼んだ。ただし、片山寛はすでに S+V 型、S+V+O 型などの呼び方をしていた[8)]。

しかし、英語教授研究所（のちに語学教授研究所）は 1932(昭和 7) 年から約 6 年間、英語の「基本文型」の調査を実施し、その成果を「動詞の型」として「研究所々報」で 1941（昭和 16）年に発表した。このように「文型」が日本語と英語の記述において登場する背景は生まれていた[9)]。英語教育で塩谷栄は 1935（昭和 10）年に *School English Grammar Teacher's Manual* の中で「文型」の用語を使用するようになった[10)]。小数であるが何人かは当時「文型」を使っていたと見られる[11)]。

このような状況の中で文型は1940(昭和15)年以降になって急に注目されるようになった。それは次の図表に示した雑誌『コトバ』で、研究論文が多数そして連続して発表されたことからである。『コトバ』誌上で「基本文型」は「特集」化され、さらにそこで[協同研究]論文が掲載された。

以下の論文は、編集者が執筆者へ「文型」に関する寄稿を依頼して作成されたものと思われ、これらは雑誌論文の特徴である即席で出来上がった観を否定できない。したがって、本稿は大出の「日本語の初歩教授から見た文型の考察」のみを取り上げ、他はタイトルだけを表示する。

そしてこのような「基本文型」が本のタイトルになったのは、『日本語基本文型』(1942〔昭和17〕)と『基本英語文型』(1947〔昭和22〕)である。『日本語基本文型』の「編纂趣意」では、外国人への日本語教育は日本語の典型的な実例、つまり日常使われている表現の型を示す学習方法がとらなければならないと述べられている[12)]。

『日本語基本文型』はいろいろな日常場面に使う文型を示した、具体的に「お……なさい〔ください〕」の型は、その例が「①お立ちなさい。②お休みなさい。」などである。また日本語における品詞の使い方からの文型と、主語、述語などの構文からの文型がまとめられた。その文型全体の数は319以上にもなっている。『日本語基本文型』の発行は忘れられた文型という用語を普及させるきっかけを作った。

さらに文型のタイトルを付した『基本英語文型』が語学教授研究所から戦後出版された。これは英語の基本文型をまとめたもので、第1型のThis is a book. から第38型のThis book is so difficult that I cannot read it. までからなっていた[13)]。

図表１　『コトバ』誌上の「基本文型」に関係する論文

1940（昭和15）年10月、第2巻第10号
石黒修　「基本文型と基本文法」
1941（昭和16）年2月、第3巻第2号
特集　日本語の基本文型
垣内松三　「基本文型の問題」
浅野信　「『基本文型の問題』の問題 — 文型と文体と」
松尾捨治郎　「外国人に教える日本語の基本文型」
乾輝雄　「日本語の基本文型」
與水実　「言表の典型について」
〔協同研究〕
三尾砂　「基本文型への手がかり」
安藤正次　「基本文型存疑」
吉岡修一郎　「基本文型への探求」
松原秀治　「三尾氏の提起を読んで」
黒野政市　「基本文型への手がかりは論理的にのみ求めてよいか」
岡本千万太郎　「ふたつの欠点」
佐久間鼎　「基本文型への手がかりについて」
1941（昭和16）年3月、第3巻第3号
浅野信　「基本文型の細論」
三尾砂　「基本文型の問題、再び」
1941（昭和16）年4月、第3巻第4号
山本忠雄　「基本文型に就いて」
徳田浄　「基本文型の問題」
1941（昭和16）年6月、第3巻第6号
大出正徳　「日本語の初歩教授から見た文型の考察」
1942（昭和17）年4月、第4巻第4号
三尾砂　「日本語文型に対する中国学生の習熟度」
1942（昭和17）年12月、第4巻第12号
三尾砂　「『日本語基本文型』を読んで」

(1)（『コトバ』第2巻第9号から第2巻第12号、1940〔昭和15〕年9月から1940〔昭和15〕年12月）復刻版『国語学研究③　コトバ』第18巻1995（平成7）年、ゆまに書房、東京。
(2)（『コトバ』第3巻第1号から第3巻第6号、1941〔昭和16〕年1月から1941〔昭和16〕年6月）復刻版『国語学研究③　コトバ』第19巻　1995（平成7）年、ゆまに書房、東京。
(3)（『コトバ』第4巻第7号から第4巻第12号、1942〔昭和17〕年7月から1942〔昭和17〕年12月）復刻版『国語学研究③　コトバ』第22巻　1995（平成7）年、ゆまに書房、東京。

Ⅲ Palmer の動詞型

Palmer の文型は『機構的文法』(1928〔昭和 3〕) で登場した、これは日本語教育で文型が使われ始めたころに符合する。次に *Specimens of English Construction Patterns* (1934〔昭和 9〕) では構文型が現れた。そして Palmer の文型は *A Grammar of English Words* (1938〔昭和 13〕) で 27 動詞型になった。この変化を具体的に見ることにする。

Ⅲ -1 『機構的文法』の文型

『機構的文法』は最初から和文で出版され、そこで「文型」が登場した。その訳者は長沼直兄（ながぬまなおえ）である。

Palmer の「文型」は次のように表現された[14)]。

図表 2 説明目録

文型	Subject × anomalous finite × infinitive × object
構型	Determinative × noun
構型	Infinitive × object
構型	Infinitive × adverbial × object

ここで Palmer は「主語 × 変則定形動詞 × 不定詞 × 目的語」のような基本的な文の構造を「文型」と呼んだ、また主語がない「決定詞 × 名詞」、「不定詞 × 目的語」または「不定詞 × 副詞類 × 目的語」を「Construction-type」または「構型」とした。

これを翻訳した長沼は『機構的文法』の中で訳者注を加えて「文型」と「構型」の意味を次のように説明している[15)]。

「構型」とは“Construction type”の訳語でこれにより多数の同型の語句を作り得る公式をいい例えば Subject × finite × infinitive × direct object は

一つの「構型」でこれより I can see it, The man will take this one, We must answer that letter. 等多数の同型句を作り得るのである。而してこれは必ずしも文章でなくて句でも差し支えないが上例のごとく文章の型を示す時には特に「文型」(Sentence type) というのである。

このことから Palmer は文の構造を明らかにした「文型」と「構型」とを同じ意味と考えた。この長沼の「訳者注」は Palmer の *A Glossary of Technical Terms* にある項目の「Construction-type」から抜粋した訳である。*A Glossary of Technical Terms* は 1927 (昭和 2) 年に東京で発刊された、そこで「構型」が説明された[16)]。

Construction-type

> A Formula according to which a number of parallel word-successions (such as sentences) be composed. Thus the formula *Subject* × *finite* × *infinitive* × *direct object* is a construction-type from which we may compose such parallel sentences as *I can see it, The man will take this one, We must answer that letter*. Thus also, from the formula *numeral* × *noun of measure "of"* × *noun*, we may obtain such expressions as *a pound of tea, two slices of bread, some hundreds of examples etc*. If the construction-type is one by which we may compare sentences (as in the example), it is called a *sentence-type*.

このことから Palmer は文の構造を明らかにした「文型」と「構型」とを同じ意味と考えていたことが推測できる。ただし、長沼の「訳者注」は

> Thus also, from the formula *numeral* × *noun of measure "of"* × *noun*, we may obtain such expressions as *a pound of tea, two slices of bread, some hundreds of examples etc*.

が除かれている。

このようにPalmerは「文型」と「構型」が基本的な構造を指すものとして同じ意味と考えていたが、Palmerが主に主張したいのはsentence-type（文型）よりconstruction-type（構型）の方であった。例えば「sentence-type」の項目では「construction-typeを見よ」と書いているにすぎないからである。

そこでこの「文型」という用語が問題になる。すでに我が国で「文型」は日本語教育者の間で、大正の末期から使用されていた。もちろん長沼は日本語の教育者としてそれを熟知していたはずで、Palmerは「文型」を長沼から紹介されたと考えてよさそうに思われる。

英語教育ではまだ「文型」が使われていなかったことを考えると、Palmerが『機構的文法』で「文型」(sentence - type）を使用したのはかなり早い時期と言える。これをさせたのが同僚の長沼からの影響であったとも考えられる。日本語教育者が考える「文型」とPalmerが考える「文型」と理論的に対比して分析する。その前にPalmerに日本語を教えたのは長沼なので、彼はどのような人物かを次に見ることにする。

Ⅲ-1-(ｉ) 長沼直兄について

長沼は英語教授研究所の理事で、戦前戦後を通じて日本語教育の重要人物であった。『機構的文法』の翻訳者である長沼は日本語でPalmerと結びついた人物で、その略歴は以下である。

図表 3　長沼直兄の略歴

1894(明治 27)年	群馬県で誕生
1915(大正 4)年	東京高等商業入学
1919(大正 8)年	同校卒業
1922(大正 11)年	ハロルド・E・パーマー等と英語教授研究所を設立、理事
1923(大正 12)年	米国大使館日本語教官
1939(昭和 14)年	文部省より臨時日本語教科書編纂図書局事務嘱託
1941(昭和 16)年	日本語教育振興会理事、
1943(昭和 18)年	財団法人日本語教育振興会常務理事兼総主事
1946(昭和 21)年	財団法人言語文化研究所理事長
1947(昭和 22)年	米軍総司令部顧問、参謀第二課日本地区語学科主任
1949(昭和 24)年	財団法人言語文化研究所附属東京日本語学校校長
1952(昭和 27)年	米国大使館日本地区語学校語学科主任
1964(昭和 39)年	東京日本語学校校長辞任、名誉校長
1965(昭和 40)年	勲三等瑞宝章
1968(昭和 43)年	言語文化研究所理事長辞任、理事
1973(昭和 48)年	死去

言語文化研究所 1981（昭和 56）.『長沼直兄と日本語教育』p.3、開拓社、東京。

長沼は 1922（大正 11）年に Palmer と共に英語教授研究所を設立し、理事に就任した、このことから Palmer と最も親しい人物であった。また長沼は日本語教育関係に従事し、日本語教育の重要人物であったことも理解できる。

長沼はすでに 1921（大正 10）年に Palmer と知り合い、Palmer への日本語教育も行った。長沼は当時まだ日本語教育の初心者でもあったことから、外国人への日本語教育の教科書および教師用解説書を網羅的に研究したと推測できる。

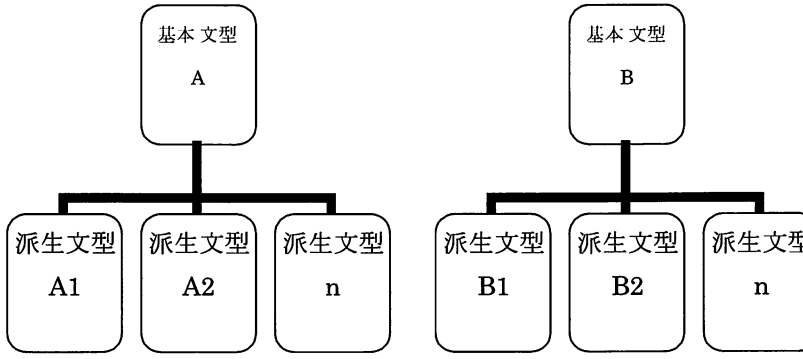
この時に長沼は、その当時使用されはじめた文法用語の「文型」を知ったと思える。長沼が研究した文献に大出が表わした南満州教育会編集部の『初等日本語読本巻一教授参考書』も含まれていたはずである。

『機構的文法』に登場する文型は日本語教育で文型が使われ始めたころと

符合する。なぜならば、大出の文型に関する理解とPalmerのそれとの一致点があるからである。両者の文型理論は、実用的で一般的な文を基本とすることである。学習者にこの基本文型を学ばせこれを土台にして応用文へと進ませるのが、彼らの文型論に対する考え方である。

大出の文型論は次のようなものである。「これは何ですか」に関する表現は「これは何か」、「これは何？」、「これは何でありますか」、そして「これは何でございますか」などがある。この中から「これは何ですか」を基本文型に選ぶ。なぜならばこれは最も一般的で基本となる文であるからである[17]。基本文型である「これは何ですか」以外の文は副次的な形となる。

『日本語教育辞典』において、文型は個々の具体的な文でなく、それらから抽出された一般的な文の形であると規定された[18]。この考えを三尾砂は図式化した[19]、それを要約すると以下になる。



同様にPalmerの動詞型または文型理論は、具体的な動詞の文でなく、様々な文から抽出された、基本となる27動詞型または27文型であると規定できる。

Ⅲ - 2 *Specimens of English Construction Patterns* の構文型

Palmer は *Specimens of English Construction Patterns* の副題に

> These being "Sentence Patterns" based on the General Synoptic Chart showing the Syntax of the English Sentence.

これらが、英語文における統語法を示す「一般的な分類表」に基づく文型である。

と記している[20)]。

Palmer は本題で「構文型」、副題で「文型」という用語を用いたが、内容的には同じ意味である。ここでは頭字語で表わされた「構文型」または「文型」が表され、その例の一部は以下である。

a. N1×AF of BE (×not) (×MPA) ×P (×EPA)
b. (Q×) AF of BE ×N_1 (×not) (×MPA) ×P (×EPA)
c. N_1 (×MPA) ×NAF (×EPA)

N_1: Subject
AF of BE: Anomalous Finites of BE
MPA: Mid-position Adverbs
P: Predicate
EPA: End-position Adverbs
Q: Interrogative words
NAF: Non-anomalous Finites

これらによれば文の構造は、

a. 主語×(文中副詞)×変則定形BE動詞×(not)×(文中副詞)×述語×(文末副詞)
I am ready.

b. (疑問詞)×変則定形Be動詞×主語×(not)×(文中副詞)×述語×(文末副詞)
Are you ready?

c. 主語×(文中副詞)×非変則定形動詞×(文末副詞)
Birds fly.

のように表せる。このように文要素のみの主語＋動詞、主語＋動詞＋補語に近い文型が完成したが、これらの構文型は疑問詞、副詞を含んでいるので、まだ充分には簡単化はされていない。Palmer はここでその他に 12 の構文も示した。これらは、次の *A Grammar of English Words* (1938〔昭和 13〕) で 27 動詞型へと細分される。

Ⅲ - 3 *A Grammar of English Words* の 27 動詞型

Palmer の 27 動詞型が登場したのは *A Grammar of English Words* においてである。ここで用語として動詞型 (Verb-Pattern) が初めて登場し、その付録で例文も示された。それが次の図表である。

図表 4 Palmer の 27 動詞型一覧

番号	動詞型	例文
1	Verb× 0	Fire burns
2	Verb×Subject Complement	This is a book
3	Verb×Adverbial Complement	I go somewhere.
4	Verb×Direct Object	I see this.
5	Verb×Preposition×Prepositional Object	I wait for it.
6	Verb×Direct Object×Adverbial Complement	I put it somewhere.
7	Verb×Direct Object×Adjective	I beat it flat.
8	Verb×Direct Object×(to be)×Adjective	I consider him right.
9	Verb×Direct Object×Object Complement	I make him king.
10	Verb×Direct Object×Preposition×Prepositional Object	I give it to him.
11	Verb×Indirect Object×Direct Object	I give you something.
12	Verb×(for×) Complement of Distance, Duration, Price, Weight	I walk a mile.
13	Verb×Infinitive	I shall go.
14	Verb×Direct Object×Infinitive	I make him go.
15	Verb× “to” ×Infinitive	I want to go.
16	Verb× “how to” ×Infinitive	I ask how to do it.
17	Verb×Direct Object× “to” Infinitive	I ask him to do it.
18	Verb×Direct Object× “how to” × Infinitive	I show him how to do it.
19	Verb×Gerund	I stop doing it.
20	Verb×Direct Object×Gerund	I see him doing it.
21	Verb×Direct Object×Past Participle	I have it done.
22	Verb×(that)×Clause	I think (that) he does it.
23	Verb×Direct Object×(that)×Clause	I tell him (that) he does it.
24	Verb× “so”	I think so.
25	Verb× “not”	I think not.
26	Verb×(Direct Object)×Conjunctive×Clause	I ask him whether.
27	Verb× “as if ” ×Clause	It looks as if it were here.

Palmer, H.E. 1938(昭和 3). *A Grammar of English Words* p. xvi, p.276-p.283, Longmans, Green and Co. London.

Palmer の 27 動詞型とは、動詞が述部でどのような文要素または形容詞、副詞類などを従えるかに応じて、27 通りに分けられたものである。例えば目的語のない動詞は第 1 型と、主格補語を取る動詞は第 2 型と呼ばれた。この 27 動詞型は Palmer が英国で (1938)（昭和 13 年）に出版した *A Grammar of English Words* の中でまとめられた。

彼は「序論」で次のように述べている[21]。これは文法書であるが名詞、代名詞、動詞、形容詞などに分けて定義や説明を行うような文法書ではない、また統語論 (Syntax) のように、主語、述語、直接目的語などに分けて文の各部分を説明するような文法書でもない。辞書のように単語を ABC 順に並べたものであるが、各単語の文法を詳細に述べているので、単語の文法書 (grammar of words) という性格の辞書である。

A Grammar of English Words は明らかに『英語辞典』で、この性格から「文型」でなく「動詞」型という品詞を用いた。 Palmer の 27 動詞型は A.S. Hornby の 25 動詞型へ受け継がれ、戦後普及した。『機構的文法』の文型、*Specimens of English Construction Patterns* の構文型、そして *A Grammar of English Words* の 27 動詞型は、一貫して基本的な文の構造を示した。したがって、これらはすべて同じ観点から表わされたと言える。

Hornby の 25 動詞型は、彼の著書『英語の型と正用法』の「謝辞」の中で述べられているように Palmer の動詞型を継承したものである。彼はそこで文型という用語でなく動詞型を用いたが、これは彼が文型の用語を知らなかったからではない。なぜなら「謝辞」の中で「Sentence Patterns」という用語も使用しているからである[22]。これは彼が文を分析したのでなく動詞の用法パターンを分析してできたものが 25 動詞型であるからである。したがって名詞句の構造を分析してできたのが「名詞型」、形容詞を分析して分類できたのが「形容詞型」となっている。この Hornby の説明は、Palmer の動詞型の他に名詞型、形容詞型を追加したとも言える。

おわりに

これまで分析して来たように、文型概念は日本語教育から誕生し、それがPalmer と Hornby の「動詞型」に受け継がれそして戦後に英語の「5 文型」となった。また Palmer の 27 動詞型が Onions と細江の「5 文型」から発展したもので、それは「27 文型」と表現できるとも主張した。Palmer の 27 動詞型は、我が国における英語教育と日本語教育の中から生まれた文法用語の「文型」から考案されたからである。Palmer の 27 動詞型は来日してから徐々に形成されて行ったのである。

「Ⅰ 文型と動詞型に関する先行研究」では、安井の「5 文型」成立の見解を批判した。安井の説は「5 文型」が「Palmer の 27 動詞型」から影響を受けたというものである、それに対して、本稿はその逆で「文型」が「Palmer の 27 動詞型」に影響を与えたことを論証した。「Ⅱ 日本語教育における文型の登場」では、文型が日本語教育の中から誕生したことを実証した。そして「Ⅲ Palmer の動詞型」では、Palmer の文型が辞典に発表されたために、主語を除外した「動詞の型」となったことを検証した。

注

1) 安井稔 1968(昭和43)-9「文型の概念とその問題点について」『文化』第 32 巻第 1 号、p.6-p.7、p.16、東北大学文学部、仙台。
2) 大出正徳 1941(昭和 16)- 6.「日本語の初歩教授から見た文型の考察」『コトバ』第 3 巻第 6 号 p.22-p.23、(『国語学研究③　コトバ』第 19 巻　1995（平成 7）年、ゆまに書房、東京)。
3) 南満州教育会編集部 1924(大正13)年 .『初等日本語読本巻一教授参考書』p.13-p17、大連、(編者・竹中憲一 2002(平成14)『「満州」植民地日本語教科書集成 1』緑陰書房、東京)。
4) 大出正徳 1941(昭和16)- 6.「日本語の初歩教授から見た文型の考察」『コトバ』第 3 巻第 6 号 p.23、(『国語学研究③　コトバ』第 19 巻　1995(平成7)年、

ゆまに書房、東京)。

5) 大出正徳 1941(昭和16)-6.「日本語の初歩教授から見た文型の考察」『コトバ』第3巻第6号 p.24、(『国語学研究③ コトバ』第19巻 1995(平成7)年、ゆまに書房、東京)。

6) 片山寛 1934(昭和9). *New Herald English Grammar* p.5、泰文堂、東京。

7) 岩崎民平 1938(昭和13). *Iwasaki's Concise English Grammar* p.12、至文堂、東京。

8) 片山寛 1934(昭和9). *New Herald English Grammar* p.8-p.10、泰文堂、東京。

9) 語学教育研究所 1943(昭和18).『外国語教授法』p.245-p.247、開拓社、東京。

10) 塩谷栄 1935(昭和10). *School English Grammar Teacher's Manual* p.8、東京開成館、東京。

11) 吉岡英幸は明治後期に「文型」という用語がまだ使用されなかったが、基本文から始める指導法が始まったとしている(吉岡英幸 1999〔平成11〕.「明治期の日本語教科書の『文型』」森田良行教授古希記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』p.391-p.404、明治書院、東京)。我が国では文の解剖が明治後期ごろにほぼ終了したことから、多くの文から基本文を抽出できるようになった。英語においてそれがなされた典型的著作は細江逸記の『英文法汎論』と Palmer の『機構的文法』である。

12) 青年文化協会 1942(昭和17).『日本語基本文型』p.1、国語文化研究所、東京(『日本語教授法基本文型—Ⅱ』1996〔平成8〕、冬至書房、東京)。

13) 語学教育研究所 1947(昭和22).『基本英語文型』p.7-p.77、開拓社、東京。

14) ハロルド・イー・パーマ、長沼直兄訳 1928(昭和3).『機構的文法』p.69、開拓社、東京(語学教育研究所 1995〔平成7〕.『パーマー選集 文法編2』第6巻、本の友社、東京)。

15) ハロルド・イー・パーマ、長沼直兄訳 1928(昭和3).『機構的文法』p.69、開拓社、東京(語学教育研究所 1995〔平成7〕.『パーマー選集 文法編2』第6巻、本の友社、東京)。

16) Palmer, H. E. 1927(昭和2). *A Glossary of Technical Termsp* p.5-p.6、英語教授研究所、東京(語学教育研究所 1995〔平成7〕.『パーマー選集 理論編2』第2巻、本の友社、東京)。

17) 大出正徳 1941（昭和 16）-6.「日本語の初歩教授から見た文型の考察」『コトバ』第 3 巻第 6 号 p.27、(『国語学研究③　コトバ』第 19 巻　1995 (平成7) 年、ゆまに書房、東京)。

18) 日本語教育学会 1982 (昭和57).『日本語教育辞典』p.162-p.165、大修館、東京。

19) 三尾砂 2003 (平成15).『三尾砂著作集』第 1 巻、p.173、ひつじ書房、東京。

20) Palmer, H. E.1934 (昭和9). *Specimens of English Construction Patterns*, The Institute for Research in English Teaching, Department of Education, Tokyo（語学教育研究所 1995 (平成7).『パーマー選集 文法篇 2』第 6 巻、p.473、本の友社、東京)。

21) Palmer, H. E. 1938 (昭和13). *A Grammar of English Words*　p. iv, Longmans, Green and Co. London（語学教育研究所 1995〔平成 7〕.『パーマー選集 雑録篇』第 10 巻、本の友社、東京)。

22) Hornby, A.S. 1958 (昭和33). *A Guide to Patterns and Usage in English* p. viii, 研究社、東京。 岩崎民平訳 1973 (昭和48).『英語の型と正用法』p. ix、研究社、東京。